

「G の政治考」 臥雲義尚ブログ



2016.10.24 vol.26 「僕らは、平尾誠二に追いつけるか」

1963 年生まれの 53 歳。僕らの世代のトップを走っていた、走っていると思っていた、平尾誠二が亡くなりました。高度経済成長の時代が終わり、日本が新たな目標を探して迷走を始めた時代に、ラグーマンとして颯爽と現れて以降、いつも僕らの 2、3 歩先を行く存在でした。

類い稀なラグビーセンスで、高校・大学とチームを日本一に導き、若くして日本を代表する選手となっていた平尾誠二を初めて見たのは、渋谷のスクランブル交差点近くの雑踏でした。モデルのような女性と静かに歩いている姿を目にして、これが平尾か、と眩しく感じると同時に、自分の中に何か力が湧いてきたのを憶えています。

当時、平尾がラグビーを通じて表現していたのは、「自由奔放なカッコよさ」だったと思います。のちのインタビューで、平尾はこう語っています。「スポーツの原点は、近所の子どもたちが集まってやっていた三角ベースのノリでしょ。自分の意思で始めて、日が暮れてボールが見えなくなるまで夢中でやって、母親が『晩御飯だよ』と呼びに来ると解散。それが中学生になってクラブに入ると、球拾いばかりで野球をやらせてもらえず、そのうえ坊主にしろと管理される。僕らより前の世代は当たり前だと思っていたかもしれないけど、『おかしいぞ、何でこんなことするの』と思うようになった。僕は『こんなのはスポーツの本来の姿じゃない。もっと楽しいもんや』と感じてました」(取材・宮崎俊哉氏)。

政治の季節がとつくに過ぎ去った大学で、野球に明け暮れていた僕は、ラグビーの王道を歩みながら、どこか反骨の匂いを漂わせる、平尾の自由奔放さに憧れました。平尾の口ひげは、パブルの先が見通せない時代に、固定観念にとらわれず、遊び心を失わず、面白いことや新しいことに挑戦するんだという矜持の象徴のように見えました。

現役を退いてからの平尾は、若くして指導者の地位に就き、「先見性と大局観」を発揮しました。34 歳で日本代表の監督に就任すると、今でこそ当たり前となった外国人選手の起用に積極的に取り組み、ニュージーランド出身のマコーミックを外国人初のキャプテンに指名しました。他の競技から適性のある選手を発掘して育成する「平尾プロジェクト」や、ラグビークラブの運営を中心に地域スポーツの普及を目指す NPO 法人「SCIX」を、今から 15 年以上前に立ち上げました。

しかし、監督を務めた 1999 年の W 杯は 3 戦全敗。翌年、強化方針をめぐるラグビー協会幹部と対立して監督を辞任すると、ラグビー界の第一線から遠ざかりました。その後、日本のラグビーは、サッカーと入れ替わって凋落の一途を辿り、日本の政治や経済と軌を一にするように、長い冬の時代を経験することになります。

W 杯 2015 で日本代表が魅せた快進撃を振り返ると、平尾誠二の改革は「早すぎた改革」だった、日本人は平尾の状況判断とスピードに追いつけていなかったんだなあ、という思いに駆られます。平尾の訃報に接するまで、平尾の存在は、また何年かしたら監督に戻ってくるんだろう、と時折思い出す程度になっていました。去年 3 月に出版された著書『求心力』を、きのう一気に読みました。「リーダーには度量と美学が必要である」。随所に、平尾が培ったキャプテンシーの強さと大きさを痛感しました。ラグビー界やスポーツ界にとどまらず、傑出したリーダーになったはずです。ラグビーの本質は、「俺はここまでしか行けないけど、あとは頼むぞ」という点にあると言われます。ボールを持って好きなところへ走っていった平尾誠二に、同世代の僕らが追いついてパスを受け継がなければいけない。今の強い思いです。

(※尊敬の念を込めて、敬称は略させていただきました。)

<編集後記>

寒くなると屋内に篋りがちです。運動不足解消に始めた街中のウォーキングですが、車だと思落としてしまう日常の風景は、再発見の連続です。特に川沿いの散歩はセイセイして眺望も素晴らしいです。女鳥羽川から東を見ると美ヶ原、振り返って少し下ると常念岳が真正面に、田川を北に向かうと白馬連山がそそり立つ、岳都松本の“リバービュー”は世界に誇れる美しさです。(くり)

<臥雲義尚を応援してくださる皆さまへ>

臥雲義尚の政治活動は、みなさまの支援によって支えられています。継続的なご寄付が活動の支えになります。引き続きご支援をお願い致します。

臥雲の会 事務局

〒390-0811

長野県松本市中央1-2-24 やまがビル2階

TEL & FAX : 0263-36-7343

E-mail : info@gaun-y.com

G 通信



が うんよしなお

2016 年 12 月・第 2 号

臥雲義尚 リポート

<巻頭言>

世界がかつてない激動に直面する中で、日本は不思議な安定と平穏が続いています。帰郷して 1 年となる松本も、凍てつく寒さを除けば、至って静かで穏やかな日常です。

「100 年ライフ」。

先進国では 100 歳を超えて生きることが当たり前前の時代が近づいている。

この秋に出版された『ライフシフト』と題する本は、未来の課題を浮き彫りにしました。100 歳生きることが前提となれば、雇用も、年金も、医療も、介護も、いまのままでは立ち行かなくなることが自明となり、働き方と生き方を大きく転換しなければなりません。

日々、中心市街地は自転車で回り、郊外にはクルマを運転して足を運んでいます。

仕事も、買い物も、快適な日常生活を送るには、交通政策が重要であることを痛感します。

100 年ライフを前提に、世代と地域事情に即して自転車・クルマ・バス・鉄道をもっと利用しやすくするためのインフラ投資を、体系的かつ迅速に実行していくことが必要です。

夏から始めた「ジセダイトーク」の開催は、5 回を数えました。

テーマは、IT 社会・自転車・林業・クラフトビール・テレワーク。

松本で新たな仕事や暮らしを創り出している若い世代の人たちと、対話を重ねています。

参加してくれた人たちも交えた議論や繋がりを、街づくりに生かしていきたいと思います。

今年は、自分にとって大切な人たちに別れを告げた年でもありました。

そのうちの 1 人である恩師が記してくれた言葉を、先日読み返しました。

「NHK を辞して市長選に立候補した男の、故郷への憶いは、伊達や酔狂ではない」。

改めて身が引き締まる思いでした。

人生 100 年時代に、長寿を厄災ではなく恩恵にする。

そのためには、長い老後を健やかに過ごせるようにするだけでなく、

人生のそれぞれのステージで幸福に暮らせるようにすることが目標となります。

静かで穏やかな日常と、若者の活気や子どもの賑やかさが共存する街が、未来の松本です。

「100 年ライフ」を生きる街へ



“臥雲の日常と横顔”

秋は、あちこちのそば祭りをハシグして歩きました。ちかいうち密かに、蕎麦打ち修行を始めるかもしれません。

11月 - 12月の主な投稿記事

- 12月
 - 12.13 マディアリテラシーを講義
 - 12.11 上田佳範さんの講演を聴く
 - 12.09 被差別部落の歴史を学ぶ
 - 12.05 対面型議場で初質問を傍聴
- 11月
 - 11.28 恩師コバシユンさん逝去
 - 11.24 子育てママとこども園視察
 - 11.19 中山新そば祭りと準備
 - 11.16 美ヶ原から雲海を望む
 - 11.12 信州カラマツ材の住宅見学
 - 11.10 アメリカ大統領選を講義
 - 11.03 市民祭で御輿を担ぐ
- 10月
 - 10.22 浅間温泉新そば祭り
 - 10.09 臥雲辰致の講演会を聴く
 - 10.09 松本城 信州・松本そば祭り
 - 10.06 山梨県立大でメディア論講義



やっぱり猫が好き！市民祭に、木曾から参加の11歳のネコ。神輿担ぎの一員ですが、担がれています。



長野県の野球人と言えば今もこの人を置いて他にいない、上田佳範さんの講演を聴く。中原監督の超プラス志向に洗脳されて選手がその気になっていったことなど、松本が野球で最も熱くなった25年前の甲子園準Vの逸話を披露してくれました。上田さんのもう1つの顔が「高校時代のイチローと松井を抑えた男」。松本から早く上田佳範を超える選手が現れてほしい。

恩師が逝った。コバシユンの愛称で親しまれ、常に無頼な風を漂わせる人だった。僕は、高校入学から1年だけ担任として面倒を見ていただいた。選挙に負けて数日後に挨拶に伺うと、「お〜っ、よく帰ってくれた。よく頑張った。寝ていて悪かったが、これで地盤ができた。こっちに基盤を置くのか。そうか、ありがとう」と言葉をかけていただいた。玄関先まで出るのがやっとだった恩師の手を握り、涙がこぼれた。今夜、コバシユンの安らかな顔を拝見し、あの時の声が蘇った。

美ヶ原から観る、北アルプスと雲海。松本の市街地から車で1時間程のところに、これだけの絶景が堪能できるスポットがあることを再認識した。ピーナスラインは来週から冬期閉鎖となるが、冬の美ヶ原の魅力を活かす方法はないだろうかと思った。



山梨県立大学でメディア論を教える、NHK時代の後輩に招かれ、「マスメディアと政治」という講義のゲスト講師として、20人程の学生たちに話をしてきました。楽しかったです。次代を担う人たちに自分の経験や知識を伝える機会を持てることは、それ自体に意義があることですが、新たな刺激を受けて自らの問題意識を鍛え直すことにつながると感じました。



SNS体験会から、臥雲の会サークル「Gラボ」誕生

松本駅前の事務所で、初めてのSNS体験会を3回連続で開催しました。年配の方々にも使い方を教えて頂き、SNSで発信する臥雲義尚の活動や考えを、さらに広く伝えられたらと企画しました。講師に、NPO 法人オフィスロイヤルの小林美代子さんをお迎えして、FB の操作を実際に体験してみました。参加者のほとんどがスマホ、タブレットは初めてというシニアの方でしたが、「大変に面白いです。」「参加者はほとんど高齢者ですか。意欲満々であきました。」「face book は自分の情報が他人に知られると思って参加しませんでした。」「今回思ったより安全とわかり、やってみたく思うようになりました。」との感想を頂きました。

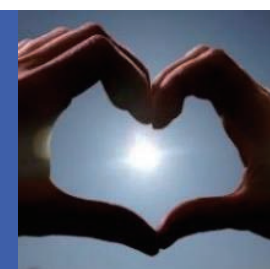
最終日には、今後もFB 上で交流していこうと、グループ「Gラボ」を作りました。今回講師でサークル代表の小林美代子さんは「皆さまの興味ある話題やご質問などを伝え合いながら、グループ機能を楽しんでみましょう！」と呼びかけています。今後も、ご要望があれば、少人数でも体験会をやりたいと思います。体験、あるいは、サークル「Gラボ」への参加を希望される方は、お気軽に臥雲の会事務局までご連絡ください。交流の輪を広げたいと思います。

SNS : Social Networking Service
コミュニティ型の Web サイト



ジセダイと語る 松本のプライド

M 松本
P プライド
P プロジェクト

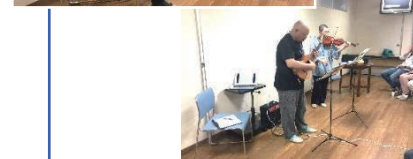


「ジセダイと語る 松本のプライド」＝ジセダイトークは、次代を担う若者と松本のこれからについて語り合うトークライブです。7月に始まったジセダイトークは、毎月1回、年内に5回開催され、12月は、合同懇親会で交流することができました。毎回、新しい事業にチャレンジする気鋭の若者をゲストに、話題のテーマを設定し、臥雲義尚がナビゲーターとなって、参加者とともに意見を交わしてきました。都市の潜在力は、モノや場所はもちろんですが、人や文化も大切な宝です。ことに若者や女性の新しい発想や取り組みは、閉塞感を打ち破るために注目したいと考えています。MPP(Matsumoto Pride Project)は、松本のポテンシャルを再認識、再発見し、松本の希望ある未来を創造するため、仲間づくりを進めていきたいと思っています。

9.30 新時代の林業で 時代を変える ゲスト:原 薫氏



第3回は、社員 12 人の林業会社を経営する女性社人(そまびと)原薫さんです。「女性の方が暮らしとつなげることに長けている」と、今までの林業ではアプローチしなかった“使い方”まで提案する。松枯れのアオを、あえて生かした家具デザインや、森林を福祉や交流の場に生かす取り組みなどを紹介しました。林業に新しい風を吹き込み「木を使う社会の仕組み」そのものを変えようとする姿に、底力を感じました。



臥雲の facebook コメントより

昨夜のジセダイトーク。気鋭の社人、原薫さんが語った、松本の林業、松本の里山が持つポテンシャルに納得。原さんは、自由な発想と体育会系のバイタリティを合わせ持ち、林業のポテンシャルを掘り起こしていく可能性を感じました。ヤマト(馬)を飼うことにした目的も、スケールが大きいです。松本のカラマツで湘南の家を建てよう。松本の里山を子育てや福祉に生かそう。

10.26 クラフトビールで 産業を興す ゲスト:林幸一氏+福澤崇浩氏

第4回は、松本にバー文化を根付かせた林幸一さんと、信州の地酒にこだわる酒店の4代目福澤崇浩さんの、2人が手がける「松本ブルワリー」をお迎えしました。今のところ委託製造で販売しているが、生産が追いつかない状態なのとか。現在、市街地に観光を兼ねたビール工場の建設地を探しているとのこと。松本のおいしい水と、地元で収穫した麦を原料に、松本工場で作られた地ビールの誕生が楽しみです。



自社工場を建設して made in Matsumoto のビール造りに挑む、若き起業家2人の構想と情熱を、じっくりと聴くことができました。参加した僕の友人が、帰りしに「10年後には本当に『松本の井深大と盛田昭夫』になってるかもしれない」と呟いていたのが、印象的でした。「挑戦する人がリスペクトされる街」に、松本をしていきたいと思っています。

11.29 ITワークで柔軟に稼ぐ〜ギグ・エコノミーの可能性〜 ゲスト:木場陽子氏



第5回は、育児環境の可能性を田舎暮らしに求め、故郷松本にUターンし、子育てしながら自宅で働く「在宅ワーク」を起業した木場陽子さんです。「大金稼げばいいわけではなく、生活とのバランスを見ながら働こうとしています。子どもの成長に合わせて、細く長く、末は75歳位まで…」と語る木場さん。その柔軟な働き方と新しいライフスタイルは、ワーク・ライフ・バランスが問われる今、参考になる生き方だと思いました。



凍てつく寒さでしたが、第5回「ITワークで柔軟に稼ぐ」と題し、松本にUターンしてパソコン1台で事務代行業を営む木場陽子さんをゲストに、新たな働き方の可能性を語り合いました。働き方が変わると、夫婦や家族のあり方が変わり、住みたい街も変わる。人生100年時代を見据え、松本を「職住遊学」混在型の都市にしていきたいと思っています。